

## 文 献 紹 介

### 神田市場史統編刊行会 編集

#### 『神田市場史 結巻』

神田市場史統編刊行会 1991年3月

A5判 842ページ

平成3年3月に「結巻」が刊行されて、『神田市場史』の全巻の刊行が終了した。この期に当たり、今までに刊行された「上・下巻」を併せて紹介しておきたい(財団法人神田市場協会・神田市場史刊行会 編集・発行、上巻1968年3月、A5判、1,433ページ；下巻1970年3月、A5判、1,581ページ)。

平成元年5月初旬に「青果物卸売市場としてはわが国最大最高の機能を果たし続けてきた神田市場」が「東京からその姿を消した」。「おそらくは開都直後から発生し、江戸・東京の“いちば”の中の“いちば”」として「400年近く機能しつづけてきた神田市場は、いわゆる“都市の新しい風”の時代を象徴するように跡かたもなく消滅した」と結巻は書き出している。

約20年前に出版された『神田市場史 上・下』は、神田市場の発生・展開について、一般に「市場」関係の資料がまとまった形で保存されていない状況下で、関連諸資料を駆使しながらその実態を詳細に開陳した。それに対して、これを受けて出版された『神田市場史 結巻』は、昭和40年以降を対象に、わが国の青果物流通の変容と、そこから起こる市場での荷受けの状況および施設に関わる資料はもとより、こうした状況に関わってきた市場関係者の「談話」、市場の過密化・環境問題までに拡大した「神田市場」の実態を都議会議事録によって再現し、大田市場への移転までの実態を開陳している。

「結巻」は昭和40年代以降を対象として、神田市場施設改善から卸売市場法の改正、国の市場・流通政策等の関係から大田市場への移転に至るまでの経緯を、800ページを越す記述によって明らかにしている。でき得る限り「詳細」に書き残しておこうとするこのような編集の姿勢は、およそ400年間の歴史を持つ神田市場の大田市場への「移転」が、旧神田市場の構成要素(卸売業者・仲卸業者・売買参加者・関連事業者)の大部分が大田市場に収容したとしても、市場は「市民」生活に直結すべきであり、大田市場への「移転」がこの意味において「市民と

共に生きてきた市場」の「消滅」であるという主張となっている。

周知のように、千代田区外神田にあった旧神田市場は、青果物の建値市場として、全国の市場価格をリードしてきた。こうした神田市場の機能は、東京の業務用青果物の大半を扱ってきたこと、すなわち強力な需要が常に存在してきたこと、価格よりも品質を重視するいわゆる「都市的需要」に支えられてきたとみてよいであろう。したがって産地側からみると「良いものは高く売れる」といった経済原理の実現の場であったし、逆に神田市場での価格のいかんが産地の「格付け」にもなっていた。

神田市場の発生が近世段階からであり、かつ大消費地「江戸」の需要を背景として発展してきたことは、市場に登場する産物の産地を逆に検索することを可能にしてくれる。例えば「水果」等の生産・流通に関する実態を把握しようとした時、近世段階の地域生産者側に残る諸資料は極めて少ない。また近代初期の段階についても、地域研究に耐え得る青果物に関する統計は、充実しているとはいえない。したがって、こうした時期に江戸・東京の市場へと流入する青果物を逆にたどることは、不足する資料の補完となり得るであろう。本書は、こうした側面において極めて高い資料的価値を持っているといえよう。

各巻に収録された時期・時代を簡単に示しておきたい。上巻では、多町時代(江戸時代)の市場から明治・大正・昭和初期までを対象としているが、とくに中央卸売市場法の成立以降の実態が詳細に扱われている。下巻では、中央卸売市場の開場から昭和40年代までであるが、中でも戦中・戦後の時期に展開した「統制」から統制の「撤廃」の過程記述は、当該時期の資料が各産地に比較的乏しいことから、「神田市場」の実態を通してその諸側面を提示してくれる。

本書が単なる「市場史」と異なる点は、「社会風俗史」的側面への配慮が随所にみられること、市場へ出荷する側、すなわち「産地」のフィールドワークを積み上げながら「神田市場」を解明していること、例えば、大正期のミカンにみられる主要産地の記述は、各産地の形成過程を知るうえで高い資料的

価値を持っていること、関係者の「談話」が証言として資料化されていること、などにあるといえよう。

本文献がいわゆる「市場史」の域を越えた好文献にまとめ上げられている背景には、上・下巻を監修

した飯塚浩二の編集意図と、これを実践した江波戸昭・小林孝一等地理学者の参加が大きく貢献しているとみてよいであろう。

(松村祝男)